

絵画修復家の アトリエから

加賀優記子……絵画修復家

二月の後半、福井の大学のエントランスホールに飾られている4メートル×3メートルの大壁画の修復のために他のスタッフ2名とともに福井の駅前のホテルに、10日間ほど滞在していました。

作品は、アクリル絵具で描かれたもので、基本的には絵具の剥落や亀裂、ニスの黄変などは無く、ちょっと見たところ何も傷んではいないようでした。しかしこの大学の学長さんも、管理部の方々も、皆さんとても作品の状態をこまやかに気になさって、話を聞くと10年前にも作品のチェック、保護のためのニス塗りを業者に依頼をしたのだそうです。

大学の皆さんが気に掛けていらした通り、成る程洗浄してみると作品の表面は洗浄した綿が

真っ黒になるほど埃で汚れていました。これは、エントランスである関係上、自動ドアが開閉するたびに外からの土埃が入り込み、また作品が暖房機に近接して設置されているため、どうしても黒っぽい汚れを含んだ上昇気流が直撃してしまうためでもありました。

それで私たちはこの作品をまず丁寧に洗浄し、次に昔塗られたニスを絵具を溶かさないように薬品で落とし、一層目の絵具を保護するためのアクリルニスを刷毛で引き、最後に強力なコンプレックスでパラロイドB72ニス（エチルメタクリレート／メチルアクリレート共重合体）を吹き付けました。これは作品横の窓から入ってくる紫外線防止のため、そして湿気の予防のための処置でした。

基本的にこれだけちゃんと手間をかけた処置を行っても、作品がもともと深緑や茶褐色が基調色になっているので実際に足場をどかせて最後に作品を見ても、「なんかきれいになった気がするかもしれない。」と言った程度の感想しか沸いてこないものでした。

私はこんな感じになるだろうと予め予測して、管理の方々に話をしていました。管理の方もきつそうだろうなあ、と納得はしていましたが、そこは人情と言うもの、なんとなく全員（私も含めて）「ちえ、つまんないの。」という顔はしてしま

ったものデス。

ほんと、私はいつもこういう大きい仕事の時は、ものすごく傷んでる作品だったらいのに、とよく思うのです。だって、修復が終わった時にとっても感激してもらえるもの。

今回の、こういう「ちゃんとやったのかどうか見分けがつかない」作品だと、ものすごくちゃんと仕事したにもかかわらず、お代金頂くのになんとか気が引けてしまう。気が弱いのかしらん？ こういう時、監視カメラつけて見ててくれないかなー。私たち、涙ぐましいほど真面目にやってるんだもん。

なにしろ、作品は大きいし高い所にあるので今回は可動式の足場を特注したのです。（私はルーブル時代にこれにいつも乗っていったんでこの上で仕事をするのはなんだかとても懐かしかったです。これねえ、慣れない人が乗ると、絵と足場の間からストンと落ちこちちやうことがあるのよね。

そして、コンプレックスで絵にニスを吹き付けるにあたっては、ニスのムラが出来ないように、一人が足場の上で吹き付け用のガンを握り、後の二人が下で足場の車輪を押す、という作業をやりました。号令とともに、動きながら揺れる足場の上でガンを操るのは結構難しい。ホントに落っこちそう。しかも、大学の図書館のエントランスと

言うことで、パーティションがきつちりと作られ、

狭い空間で空気が流通してない。ニスはトルエンなんてカラダに悪い代物で溶かしてあるのだから、苦しい……。毒ガスマスクはあったのだけれど、一人分買っただけで足りなかったのです。

息継ぎのために、下手にドアをしょっちゅう開けると図書館内に有機溶剤臭が流れてしまう。だから極限まで我慢をして仕事をした。ニスを吹き終わった後に、思わず私たちは転げるように外のロビーに走り出てしまった。

ね、ホントに真面目でしょ。この犠牲的精神！（ちなみに、この大学は病院が併設されている医学部なので、私たちのように白衣を着けた人は一杯いる。しかし、私たちのように目を血走らせて毒ガスマスクをして走り出てくるのを患者さんが見たら、きつと怖かったかもね。）

最後の、引渡しの日、大学の管理の責任者の方が私に聞きました。「ね、先生、保護のニスも2層も引いてもらっただし、これでこの作品は永久に大丈夫だね。」うん、いや、残念だけどそんなことはありやしません。永久に持つ物質なんてこの世にはおまへんと私が返答申し上げたら、ものすごく悲しい顔になってしまった。「だって、先生、私にはこの作品に責任があるんです。またいつか傷むかと思うと心配で心配で、



防毒マスクをつけてニスをスプレーする筆者

めんどくさいわ……。」

そのお気持ち、痛いほど判ります。そう言えば、この修復をした後に、作品をアクリルケースで覆う、ということも考えたんですけどね。それで、いしど画材の社長さんにも、わざわざ調べて頂いた。で、それは可能だったんだけど、でもこの作品を一枚のアクリルで覆うとなると、特注の水族館用のアクリルになって、莫大な費用がかかってしまう。どっちみち、もし絵にカビが発生したら、これを取り外すのに手間がかかる。または、他の方法としては、2枚に分けた既製のアクリルを入れるという手もある。しかしこれだと、絵が分かれて見えてしまう。それで、今回は諦めたんですよ。

アクリル板も、パラロイドのニスも、紫外線劣化には有効だけれど、帯電性があるのでどうしても埃がかかってしまう。それでもスクラッチ（引っ掻き）などの物理的な傷みには強いのです。今のところ、もし絵画作品の完璧な保存方法を考えていたら、エージレスなんかの脱酸素剤を入れて真空保存するしか方法は無いのではないかしら。それで無ければ、また埃の洗いを10年後まだ私はきつと元氣だからやらしてくださいね！と、管理の方に、言ってみました。そうやって、いつも心配して気にかけていることが、面倒くさいけど作品保存には最も良い方法なのです、と。

そして今回のニスは黄ばみが出ないので、40年

くらいは持つかもしれない。もちろん、責任者のあなたはここにもう居ないでしょう。……おそろしく、私も、きつと。でも、またいつか、元氣に足場に乘れる若い人が、引き継いでこの絵を大事にしてくれると思う。

このようにして、すべての遺産は引き継がれるべきなんだから。とりあえず、足場に上るのが得意な、絵具を溶かしたりしない、しかも防毒マスクを忘れない、優れた修復家がやってくるといいな。

かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は講座で修復工房を主宰。



足場の上で